

頌古

第七則 提婆宗話

白田 劫石

垂示に曰く、明主は臣を知り、明父は子を知る。況んや明眼の大宗匠は、透関の眼を具し、一句を見得して、乃ち曰く、此れは是れ一千五百人の善知識の語なり。片言を聴き得て、乃ち曰く、大嶺の古仏 光を放って射て者裡に到ると。

是れ叢社の光輝、衲僧の榜様、作麼生か是れ明父 子を知る底？

本則は、巴陵顥鑑こうかん禪師の三転語中の第一転語に関する提唱である。

『碧巖集』にも、この則に関する垂示と偈頌があるが、これと比較して白隱老漢と大灯国師の法の扱いをみるとおもしろい。

『碧巖集』では、円悟禪師は、この三転語が般若の相と体と用を明らかにしたものとして、そこを睨んで垂示しているが、ここでは白隱老漢は、父の子を見る目、師家の学人の境涯を鑑別する活眼を中心にしている。

本則の巴陵顥鑑は、雲門大師の法を嗣いでおり、その宗風に紅旗せんじゃく閃爍の香りがする。嗣法の書を呈せず、次の三転語を呈したという。

如何なるか是れ提婆宗 ぎんなんり 銀椀裏に雪を盛る

如何なるか是れ吹毛劍 珊瑚枝々 月を撐とうぢやく著す

如何なるか是れ道 明みょうげん眼の人 井に落つせい

雲門大師は、これを一見して大いに喜ばれ、「他日 老僧寂後の忌辰には、ただこの三転語を拳すれば恩を報ずるにたる」と言われたという。

何処にそのような嗣法の宗旨があるか、雲門大師は、この三転語の何処に伝法の一著子を見たのであるか？ 白隠老漢は、この「垂示」で、箇事このじの「修行」の要は、伝法にあるが、その伝法とは要は人物である。真の人物でないと法は亡びる。だから人物の真偽をみぬく道眼というものが肝心かんじんで、古人は皆これをもっていた。それは、法の百年千年の将来にかかわることなのである、と言われる。

古来から「参禅弁道の要諦は、仏祖の慧命を嗣ぐに在り。上士は怨に嗣ぎ、中士は恩に嗣ぎ、下士は勢に嗣ぐ。怨に嗣ぐ者は道に在り、恩に嗣ぐ者は人に在り、勢に嗣ぐ者は己おのれに在り。道に在る者は大火真金の如く、人に在る者は歳寒松柏の如く、己に在る者は春風楊柳の如し」と言われている。志が道に在り、大道をすべてに優先させる人物でないと、法を荷担し嗣法することはできない。

この人物の真偽を見ぬく眼を、ここでは「透関の眼」と言っているが、これがないと法は亡びる。師家の具備せねばならぬ資格である。

この「垂示」では、その二つの実例を挙げている。

雲門が初めて雪峰に参じた時、一僧に伝語して、“この老漢、未だ頂上の鉄枷を脱却せず”と言わしめた。

雪峰は忽ちこれを勘破して、“それは、お前の語ではないであろう。荘上に千五百人の善知識を迎え来れ！”と言って、雲門を迎えた。これが「垂示」の「一千五百人の善知識の語」の因縁である。

次は、疎山寿塔の因縁である。

撫州の疎山匡仁禅師（洞山良价禅師の法嗣）に主事僧が寿塔を造

り終わった旨を告げたとき、疎山は、“工匠にいかほど錢を与えたか”と問うた。

僧云く、“一切和尚に在り。”

疎山云く、“三文を以て匠人に与えたらよいか、それとも兩文を以て与えたらよいか、一文を以て与えたらよいか、言うてみよ！もし言えねば、わしは寿塔などはいらぬぞ！”

主事憎は、これを聞いて茫然自失した。

後に僧あって、大庾嶺だいぐりょうに住庵していた羅山道閑ぜんかつ禪師（岩頭全ぜんかつ禪師の法嗣）にこのことを告げた。

羅山云く、“お前は帰って疎山に次のように告げよ。もし三文を以て匠人に与えたならば、和尚は生涯けつじょう決定して寿塔を得ることはできない。もし兩文を以て与えたならば、和尚と匠人と共に一隻手を出すことができよう。もし一文を以て与えたならば、匠人を眉鬚びしゅ墮落せしめるであろう。”

その僧は、このことを疎山に告げた。

疎山は、威儀を具して大庾嶺を望み、礼拝して嘆じて云く、“もうこの世では、真の禪者にはお目にかかれぬと思っていたが、大庾嶺に古仏がいて、光を放ち此間しかんに至ったわい！しかしそれはそうだけれども、これまた臘月裡の蓮花じゃ。”

羅山は、これを聞いて云く、“自分がそのように言ったのも、既に是れ龜毛長きこと数尺。”

大宗匠の透関の眼というのは、かくのごとき有様である。

さてそれでは、これから示す雲門大師がその嗣法の証として肯った巴陵三転語の第一転語の玄旨は何か？

その透関の眼の実例を脚實地にとつくりと明らめてみよ、と本則を喚び起した。

拳す、僧 巴陵に問う、如何なるか是れ提婆宗？ 陵云く、銀椀ぎんなん

裏に雪を盛る。

本則は僧との問答の形をとっているが、これはもちろん一則として形を整えたまでのことである。

さてここで「如何なるか仏?」「如何なるか祖師西来意?」などの問いではなく、提婆宗をもち出したところに第一に眼を着ける要がある。

提婆宗とは、迦那提婆尊者の宗風のことで、提婆という人は、初め外道であったが、第十四代祖師 龍樹尊者に見えて、^{まみ}仏心宗を伝え第十五代の祖師となった方で、すこぶる議論に長じ、能弁にして外道を降伏せしめたので、その宗風を人呼んで提婆宗となした。仏心宗と同義である。

馬大師は、これについて「凡そ言句ある、是れ提婆宗、只 ^{しこ}此箇を以て主となす」と言っている。これは『楞伽經』に「所謂仏語は心を宗と為し、無門を法門と為す」とあるのを拏したもので、祖祖密付底の仏心を言っている。この「此箇」、こやつが手に入らねば、提婆宗は見えぬ。

さてその「此箇」とは一体何か? ^{いささ}些かでも一念が入ったらスカタンである。こやつばかりはどうしょうもない。

僧 巴陵に問う、如何なるか是れ提婆宗?

「如何なるか是れ提婆宗?」この問いで直に提婆宗の玄旨の「此箇」をしてとらねば、はや千里を距ててしまう。わずかの一念のかけらでも入ったら提婆宗ではない。その問い自身の中に答えが含まれている。

『碧巖集』のこの則のところで、円悟が下語して【汝が咽喉を塞断す】とおき【七花八裂】とおいているが、喉もとをグッと抑えてグーの音も出させず、また悟りなど木っ端^{みじん}微塵に打碎く気が横溢^{おういつ}しているとしているが、まことにその通りである。

白隠老漢の下語。【物必ず先ず腐って後、虫之に生じ、人必ず疑って後、わずかに之に入る】 元来この世界の真実相は、瀟洒しょうしゃを絶した清浄法身、円陀々で爪のかけ場もない。そこにわずかに疑念や所持の一念が生じて、我他彼此が生れ、生死界に頭出頭没する。物も、腐ることがなければ虫の湧くことはない。虫とは業識障である。

提婆宗の当体も、真っ向うこの通りで、一念の入る余地はない。チラッとわずかに一念が入れば、手からすりぬけてしまう。

巴陵云く、銀椀裏に雪を盛る。

提婆宗に対して、巴陵が手をつけたが、無孔の鉄鎚えに柄をすげたもので、手がつけられぬ。水を飲んで冷暖自知するより仕方がない。

『碧巖集』の頌では「老新開 端的別なり」と言われているが、老新開とは巴陵のことで、まことに端的別なりで、手のほどこしようもない。

銀椀が白で、雪が白、同じく白で見分けがたいが、椀と雪とは全く別で、同中の異の宗旨を含むとか、あるいは明中暗 暗中明の宗旨であるなどと些かでも理が入れば、玄旨は取り逃してしまう。

ここの下語。【相罵ののしすることは汝に饒ゆるす、嘴を接げ。相唾することは汝に饒そそす、水を潑かげ】如何に罵倒し、どんなに唾しても、こやつは蚊子ぶんし 鉄牛かを咬むという有様で、仏祖も倒退三千である、との意であるが、ただそればかりでなく、その中に提婆宗の宗風というものを含ませてある。

頌に曰く

提婆宗 分節し難し
誰か道う 銀椀裏に雪を盛ると
大地山河 一等の風
人間天上 瀟洒絶

提婆宗 分節し難し

まず本則の肝腎かなめの「提婆宗」をとりもち来って、提婆宗！と提起した。これで本則の頌は終わりである。あとは余裕。

提婆宗の端的は、分解して示すことも、注釈をほどこして分らせてやることも、何ともならぬ、手のつけようがない。

『宝鏡三昧』に、「夜半正明 天曉不露 銀椀裏に雪を盛り 明月に鷲を蔵す」とあり、これは暗中の明、明中の暗なる般若の相を示したものであるが、その端的は仏眼もうかがうことのできぬ密付底で、その言葉についたら遠ざかるばかりである。仏祖といえども垣のぞきができない。畏るべき一著子である。

ここの下語。【何の難きことかこれ有らん】いや何でもないことじゃ。口があれば口を使っていくらでも説いたらよろしい、そんな窮屈なものではない。また【破草鞋 湖辺に拋向し着せよ】そんな破れた古わらじ、古道具はわしのところでは用はない。見るのもいやじゃ、捨ててしまえ！

これによって巴陵銀椀の宗旨が生き生きと甦った。

誰か道う 銀椀裏に雪を盛ると

『碧巖集』では「道うことを解す 銀椀雪を盛る」とあるが、ここでは「誰か道う云々」となっている。この「誰か道う」という一語には、言わずもがなのこと、折角の真理に疵がついたという含みがみえる。「道うことを解す」とはまた違った含蓄があり、大灯国師の抜山の力が感じられる。

ここでの下語。【打破了也】ヘン！ そんなものは木っ端微塵に叩きわったわい。【是れ何の繫^{ける}駟^{けつし}櫛子】そんなものは、三文の値打ちもないわい。【殃門^{えいもん}に禍を添う】そんなお荷物はまっぴらご免蒙りたい。いやじゃ！ いやじゃ！ 見るのもいやじゃ！

大地山河 一等の風

見渡す限りの山河大地、一等の風が颯々と吹いていて、どこから

どこまでも吹き通して、吹かぬところとてない。

まことに清風匝地、何の極まりかあらんで、何ともさばさばして、スツケラカーンとしている。

しかしその風についてみても分からぬ、こやつの消息じゃ。

ここの下語。【七花八裂】折角塵一つないきれいなところに、つまらぬことを説いて滅茶苦茶にしてしまった。言わずもがなである。

【腋^{わき}を截^さいて羽^{はね}を出す】老婆心から何か示そうとして、機の熟せぬ学人に、説明などを加えると、片輪にしてしまうぞ、と抑えた。当て推量を起すようなことはかえって慧命を絶つことになるぞ。

人間天上 瀟洒絶

『碧巖集』では「天上人間 自知せず」とあるが、ここでは「人間天上 瀟洒絶」、この「絶」の一字が何とも千鈞の重みがある。ズバ抜けている。ここの下語は【梅瘦せて春を占めること少なく庭寛くして月を得ること多し】瀟洒絶の当体、提婆宗の此箇を見事に詠いあげた。ここらは吟じ来り吟じ去って、オンノリと香りを嚙^かみしめるより術^{すべ}はない。弁をつけたらいかん。ガツンとくるところがある。【脚下泥深きこと三尺】脚下を看よ！ きれいごとを考えていると危ないぞ！ 脚下の泥の深みにドンばまるぞ。

白隠老漢は、「評」の中で「此れは是れ西天此土、祖祖心授底の秘訣、仏仏護惜底の機要なり」と言っておられる。

オット危ない！ くれぐれもだまされぬように。

著者プロフィール



白田劫石（本名／貴郎）
ごつせき

大正4年、東京生まれ。東京帝国大学倫理学科卒業。元千葉大学名誉教授。昭和11年、両忘協会立田英山老師に入門。人間禅教団第三世総裁・師家。庵号／磨甌庵。平成21年2月帰寂。